

Title	ロシア語史概説(3) : 序説
Author(s)	石田, 修一
Citation	大阪外国語大学論集. 3 p.19-p.34
Issue Date	1990-09-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79493
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ロシア語史概説(3) (序説)

石田修一

Очерк по истории русского языка (3) (Введение)

Сюити ИСИДА

Ⅶ. Две диалектные зоны позднего праславянского периода и образование восточнославянского языкового единства

〔Ⅶ〕後期スラヴ祖語における南・北方言と東スラヴ語の成立

5世紀頃からの、南スラヴ人のバルカンへの移動に関連して、スラヴ祖語の初期に見られた東西対立関係は次第に南北対立関係へと変わって行ったと考えられる。すなわち、スラヴ祖語が後期に達する頃には北方言と南方言の対立関係が明らかになって行くのである。また、音韻・音節構造の変化という観点から見れば、スラヴ祖語を前・後期に二分するのは開音節法則(закон открытого слога)である。その後開音節法則は数世紀にわたってスラヴ語の音韻・音節構造を律することになって行くが、その開音節法則の実現の態様を、例えば前期スラヴ祖語の、子音間ないしは語頭閉音節の〔母音+流音〕結合(diphtongoid 準二重母音結合)、すなわち *tъrt、*tort、*ort (tは任意の子音)等の、現代スラヴ諸語における再編結果に観察する時、そこには概して(個別言語内でのそれぞれの事情による一般原則の放棄、例えば以下のチェコ語に見られる *dъlgъ > dluh 等の場合を除いて)当時のスラヴ語を大きく南・北に二分した等語線の存在が明らかになるのである。

1) *t_ɾrt 型

スラヴ祖語	〔南部〕	古スラヴ	ブルガリア	セルボ・クロアチア	スロヴェニア	チェコ	スロヴァキア
*g _ɾ rd _ɾ		грѣдѣ	грѣд	гѣрд (gōrd)	grđ	hrdý	hrdý
*g _ɾ rb _ɾ		грѣбѣ	грѣб	гѣрба (gŕba)	gr̂ba	hrb	hrb
*b _ɾ rdo		бръдо	бърдо	бѣрдо (bŕdo)	bŕdo	brdo	brdo
*v _ɾ rba		вьрба	върба	вѣрба (vŕba)	vŕba	vrba	vrba
*v _ɾ lna		вьлна	вълна	вѣлна (vŭna)	vólna	vlna	vlna
*d _ɾ lg _ɾ		длъгѣ	дълг	дѣг (dŭg)	dólga	dluh	dlh

〔北部〕	古代ロシア	現代ロシア	ポーランド	ソルブ(下,上)
	гѣрдѣ	гордый	hardy	gyardy, hordy
	гѣрбѣ	горб	garb	gjarb, horb
	бѣрдо	бѣрдо	bardo	bardo(下)
	вьрба	верба	wierzba	wjerba
	вьлна	волна	wełna	wałma, wołma
	дългѣ	долг	dlug	dlug, dolh

この *t_ɾrt (*t_ɾrt, *t_ɾlt, *t_ɾlt) 型の場合、流音の成節化とそれによる流音前弱母音の吸収 (t_ɾrt > trt 等) を特徴とする南部に対して、北部では流音前弱母音を一貫して保存する傾向が現れている (t_ɾrt)。したがって、古スラヴ語の正書法に見られる弱母音字〔ɾ, ь〕は先行流音の成節性を表す記号であり、通常の弱母音を表さない (ただし、古スラヴ語では、本来的な *tr_ɾt 型を継承した場合も、tr_ɾt 等の形式で書かれるが、その場合の〔ɾ, ь〕は成節弱母音を表す。例、крѣстъ < *kr_ɾst_ɾ, 古独 krist)。なお、ブルガリア語の書記法には、他の南スラヴ方言とは異なって弱母音の位置に整合性が見られないが、ここでの流音前後の母音は、一旦流音の成節性が失われて以後新たに復活したものだからである。

さらに、*t_ɾlt や *t_ɾlt における〔l〕の円唇軟口蓋音的な (labiovelar) 調音のあり方が先行母音にも及んで、古代ロシア語がこれをそれぞれ t_ɾlt ; t_ɾlt > tolot (所謂「第一次母音重挿」первое полногласие → 以下の例参照) に変えてしまったことはよく知られているが (第一次円唇化 первая лабиализация)、こうした再編過程が早期に現れていること、あるいはまた *t_ɾrt における流音の硬音化が後れた、すなわち流音に後続する子音の性質によっては流音が軟性を比較的長期にわたって保存したことも北方言の特徴である。したがって、流音の軟性は流音前母音に反映しており、上例において *b_ɾrdo > bardo, бѣрдо であるのに対して、流音の硬化が後れた唇音前・後口蓋音前の流音を含む場合は *v_ɾrba > wierzba, wjerba, верба となり、вѣрба とはなっていない。

2) *t o r t 型

スラヴ祖語	〔南部〕	古スラヴ	ブルガリア	セルボ・クロアチア	スロヴェニア	チェコ	スロヴァキア
*b o r d a		брада	брада	bráda (bráda)	bráda	brada	brada
*v o r n a		врана	врана	vràna (vràna)	vràna	vràna	vraná
*g o l v a		глава	глава	gláva (gláva)	gláva	hlava	hlava
*m e l k o		млъко	мяко	mléko (mléko)	mléko	mléko	mlieko
*b e r g ь		брьгъ	бряг	brĕg (brĕg)	brég	břeh	breh

〔北部〕 古代ロシア 現代ロシア ポーランド ソルブ(下,上)

борода	борода	broda	broda
ворона	ворона	wrona	wrona
голова	голова	głowa	głowa, hłowa
молоко	молоко	mleko	mloko
берегъ	берег	brzeg	brjog, brjóh

上例 *tort (*tert, *tolt, *telt) タイプの結合群の場合、南部では母音と流音とのメタテシス (metathesis, 音位転換) と流音後長母音の結合によって (*tort > trat 等) 開音節法則を実現したが、北部では流音後に短母音を置いている (*tort > trot, torot)。この差異の説明には様々な仮説が行われているが、例えばセリーシシェフは、閉音節の〔or〕等の準二重母音結合 (diphthongoid) にあった長音性の重点が母音と流音の何れに落ちるかによって二方向に分かれたとしている⁽¹⁾。その通りだとすれば、本来、南部では母音に、北部では流音に長さの重点があったために生じた差異だということになる。すなわち、南部では、*tōrt > *tārt > trat 等 (*ō, ā ; ē > a ; ě) であるのに対して、北部では、*tort > tor^ot > trot (レッヒ群)、torot (東スラヴ、第一次母音重挿 первое полногласие)を生じたのである (*ǫ, ǣ ; ǝ > o ; e)。

3) *o r t 型

スラヴ祖語	〔南部〕	古スラヴ	ブルガリア	セルボ・クロアチア	スロヴェニア
*o r v ь п ь		равьнь	равен	rávan (rávan)	ráven
*o l d ь j ь		ладии	ладя	lađa (lāda)	lādja
*o r d l o		рало	рало	rało (rālo)	rálo

〔北部〕	古代ロシア	現代ロシア	ポーランド	ソルブ	チェコ	スロヴァキア
(下降調)	ровен	ровный	równy	rowny	rovný	rovný
	лодья	лодка	łódź	łodz	lod'	lod'
(上昇調)	рало	рало	radło	radlo	radlo	radlo

*ort, *olt の再編形式も *tort 型に近いが、ここでは当該音節に落ちるイントネーション・タイプの差が大きく再編結果に関わっている。すなわち、上昇調 (acute) では南・北に差は見られないが、下降調 (circumflex) では、南・北の差を生ずるに至るのである。上昇調では母音に長さの重心があって *ōrt, *ōlt > *art, *alt > rat, lat (メタテシス) となるのに対して、下降調の場合は、その母音が南では上昇調と同じく長母音、北では短母音のままであったからである: *ort, *olt > rot, lot。

南と北を分かつ等語線は、以上のような開音節法則実現の態様の差に現れるだけではない。南・北の差は次のような、歯音や唇音の口蓋化 (палатализация) ・ヨット化 (йотация)、あるいはまた子音群短縮 (упрощение) — *kt', *gt', *tj, *dj, *pj, *bj, *mj, *vj, *tl, *dl, *kǫě, *gǫě — の結果にも現れている。

4) *kt', *gt'

スラヴ祖語	〔南部〕	古スラヴ	ブルガリア	セルボ・クロアチア	スロヴェニア	古代ロシア	現代ロシア
*noktь		ношть	нощ	nōh (nōć)	nóč	ночь	ночь
*mogtь		мошть	мощ	mōh (mōć)	móč	мочь	мочь
*mogti	(不定詞)	мошти	(мога)	mōhi (mōci)	mōči	мочи	мочь

(ただし、ブルガリア語は不定詞を持たず、1人称単数現在形)

〔北部〕	ポーランド	ソルブ	チェコ	スロヴァキア
	мос	нос, nóc	нос	нос
	мос	móc	мос	мос
	móc	móc	moci	mōct'

5) *tj, *dj

スラヴ祖語	〔南部〕	古スラヴ	ブルガリア	セルボ・クロアチア	スロヴェニア	古代ロシア	現代ロシア
*svetja		свѣшта	свещ	svéha (svéća)	svéča	свѣча	свеча
*medja		межда	межда	měha (mèđa)	mēja	межа	межа

〔北部〕	ポーランド	ソルブ	チェコ	スロヴァキア
	świeca	swěca	svíce	svieca
	miedza	mjaza, mjeza	meze	medza

6) *pj, *bj, *mj, *vj (非語頭)

スラヴ祖語	〔南部〕	古スラヴ	ブルガリア	セルボ・クロアチア	スロヴェニア	古代ロシア	現代ロシア
*kupjǫ		кѹплѣ	купя[кѹплен (kǹpljen)kupljen]	куплю	куплю		
*zemja		земля	земя зѣмля(zèmlja)	zēmlja	земля	земля	
	〔北部〕	ポーランド	ソルブ	チェコ	スロヴァキア		
		kupię	kupju	[kupený	kupený]		
		ziemia	zemja	země	zem		

7) *tl, *dl

スラヴ祖語	〔南部〕	古スラヴ	ブルガリア	セルボ・クロアチア	スロヴェニア	古代ロシア	現代ロシア
*pletlъ		плелъ	плел	плѣо-плѣла(plèla)	plel	плелъ	плел
*sadlo		сало	сало	сѧло(sǧlo)	sálo	сало	сало
	〔北部〕	ポーランド	ソルブ	チェコ	スロヴァキア		
		plótł	pletł	pletl	pletol-pletla		
		sadło	sadlo	sadlo	sadlo		

8) *kuě, *guě

スラヴ祖語	〔南部〕	古スラヴ	ブルガリア	セルボ・クロアチア	スロヴェニア	古代ロシア	現代ロシア
*kvoitъ		цвѣтъ	цвят	цвѣт(cvět)	cvět	цвѣтъ	цвет
*gvoizda		звъзда	звезда	звѣзда (zvězda)	zvězda	звъзда	звезда
	〔北部〕	ポーランド	ソルブ	チェコ	スロヴァキア		
		kwiat	kwět	kvet	kvet		
		gwiazda	gwězda, hwězda	hvězda	hvezda		

以上のように、4)、5)の口蓋化・ヨット化は南・北ともに歯擦音(sibilant)を生じているが、ただそれが南部では所謂シュー音(шипящий, hushing sound)を、北部ではスー音(свистящий, hissing sound)に終わっている。また、6)の非語頭での唇音のヨット化は、南部では所謂「挿入音l」(“l”epentheticum)を生じているが、北部ではそれを知らない。これはヨット[j]によって唇調音に舌の調音が加わり、ヨットの調音点が口蓋中部から前部へ移動したために生じたものであろうが、この現象が、語頭の場合には、すべてのスラヴで発生している(*bjudo > 古スラヴ, ブルガリア, ロシア блюдо, ポーランド bluda, ソルブ blido 等)こと

を思えば、語幹末でのヨットによる口蓋化の程度は語頭でのそれに比して弱いものであったと言えよう。7) の差異は語根先頭では発生しない (*dolnis > длань 等)。8) は通常、所謂第二次口蓋化 (вторая палатализация)、すなわち音節内同化法則 (закон [внутри]слогового сингармонизма) に従って、二重母音から発生した前舌母音〔ɛ〕 (*oi, *ai > ɛ) に先行する軟口蓋音 (k, g, ch) がその前舌母音〔ɛ〕の調音に合わせる形で音質を変え、それぞれ歯擦音〔c', dz' > z', s'〕に変質した現象の一環として説明されるが、この場合は軟口蓋音と母音との間に本来軟口蓋音に伴っていたであろうソナント〔ɥ〕が介在しており (所謂 labiovelar)、それが北では比較的早期に唇子音〔v〕に変質したため母音の軟口蓋音に対する影響を阻止し得たのに対して、南ではこのソナントがこの口蓋化の時期にも両唇音的な音質を維持し続けたために音節間同化を阻止し得なかったものだと考えられる。

さて、以上によって、後期スラヴ祖語の南方言は今日の南スラヴ語が、また北方言は西スラヴ語レヒ群が継承していることが判明するが、一方、西スラヴ語のチェコ・スロヴァキア群とロシア語を含む東スラヴ語は南・北両方言に関係していることが明らかである。すなわち、チェコ・スロヴァキア群は全体として北方言の特徴を示しながらも、開音節法則の実現に関連して南スラヴ語と同じような再編結果を示し、それによってレヒ群と対立している。また東スラヴ語は、開音節法則のあり方では北方言 (レヒ群) に、また口蓋化等の面では南スラヴ語に接近しているのである。

地理的に見て、チェコ、スロヴァキアは古いスラヴの中心に位置しており、したがって当然北と南の接点上にあることから、それらが南・北両方言に関係することは容易に肯んずることができる。この間の事情に関連してベルンシュタインは次のように書いている。「7世紀の前半スラヴ人達はサモの指揮の下アヴァールに対して蜂起し、最初のスラヴ国家の一つを建設した。それはチェコ、モラヴィア、スロヴァキアおよびスロヴェニア人居住域を包含するものであった。この国家は30年余存続したが、チェコとモラヴィアのスラヴ人たちはもはやアヴァール汗国には入らず、西ローマ帝国の朝貢国となった。東アルプスには最初のスロヴェニア人国家カラントニア (Karantanija) が建設されたが、長続きはしなかった。スロヴァキア人の先祖は南スラヴ人の先祖と共にアヴァール汗国内に留まり続けた。チェコ語、特にスロヴァキア語と南スラヴ語の緊密な結びつきは (アヴァールのくびき以前の) 4～5世紀、および特に6～7世紀の歴史的条件下によって決定されたものである。一連の音声学的かつまた主に造語法の特徴はチェコ語、スロヴァキア語と南スラヴ語を結びつけている。しかし特に我々にとって興味深いのはこの時期一局部的な等語域たるスロヴェニア・スロヴァキア群が形成されたことである。特徴の多さからしてこの等語域は他に比肩するものはない。それは、スロヴェニア人とスロヴァキア人の祖先が長期にわたって緊密な接触関係を持ってきたことの証左である。……アヴァール国家の時期スロヴェニア人とスロヴァキア人の間には極めて緊密な関係が存続したのである。……9世紀初頭カール大帝によるアヴァール人とアヴァール汗国制圧以後スロヴァキア語は新しい時代を迎えた。チェコ語、

また一部ポーランド語との濃密な接触関係期が到来したのである。個々の西スラヴ語の長期の独立期に次いでこの時期からは統合傾向が現れて来るのである。現代の西スラヴ語の共通性は9世紀の初頭から形成されるものである⁽²⁾。そしてサモ王国以後、9世紀半ば(830年)大モラヴィア公国が成立して、その頃よりレツヒ群との接触関係が始まるが、10世紀始め(906年)ドナウ中部へのウゴル(マジャール人、ハンガリー人)の来襲という、言わばスラヴ人の間に打ち込まれた楔によって、結局チェコ、スロヴァキア方言は南スラヴ方言から隔絶されることになるのである。

こうしたチェコ、スロヴァキアの位置とは違って、東スラヴ人は地理的に決して南・北の中間地点に位置している訳ではない。それにもかかわらず東スラヴ語は南・北両方言に繋がる特徴を包含しているのである。それはどのように説明され得るのであろうか。そこで、一般に歴史文法が挙げる東スラヴ語の特徴を確認しておく必要がある。これらはすべてスラヴ祖語崩壊後、すなわち早くとも6～7世紀以後発達してくる特徴であり、東スラヴの最古文献にも反映しており、したがって11世紀頃には古代ロシア全体を覆っていた現象だと考えられている。

①「第一次母音重挿」の実現、すなわち *tort, tert, tolt, telt > torot, teret, tolot, tolot (*telt > tolot は第一次円唇化、ただし〔el〕の前に軟子音が来る時は *telet > telot、例、古代ロシア шеломъ > *chelmъ, cf. 古スラヴ語 шльмъ, 独 Helm)〔上例2〕。

② *tъrt, tьrt, tьlt, tьlt > tort, tert, tolt, tolt (*tьlt > tьlt > tolt は第一次円唇化)〔上例1〕。

③ *ort, olt > rot, lot (下降調の場合)〔上例3〕。

以上①、②の再編形式には、南スラヴ語およびチェコ・スロヴァキア群対東スラヴ語およびレツヒ群という対立特徴が現れている(勿論、③ではチェコ・スロヴァキア群は北方言の特徴をもって現れているが)。何れにせよ、スラヴ祖語南方言では、例えば tort 型においてこの閉音節中の母音を長音化し、音位転換(メタテシス)後、すなわち〔流音+母音〕となって後、流音後の母音に長音性を移すのである(trōt)。長母音〔ō, ā〕は、スラヴでは〔a〕に転じたため、それは trat 型の結果を得ている。この態様は、〔弱母音+流音〕結合の場合も同じである。すなわち、tъrtの閉音節中に発生した長音性を成節流音に移し、そのことによって先行の弱母音は非成節音となって流音に吸収されるのである(tъrt > tьrt > trt)。一方、北方言はこの再編形式が流音を襲う前にスラヴ祖語から分化したのである。したがって短母音を包含するか(trot, torot)、tъrt から生じた閉音節形式を残すのである。そしてレツヒ群と東スラヴ語の差は、その後の別々の発展経過を示しているにすぎない。

④第二次軟子音(вторично смягченное согласные)の発達。スラヴ祖語の最も早い時期の言語改新(инновация)の典型は一般に原初軟子音(исконносмягченные согласные, исконно мягкие согласные)と称される口蓋音の生成である。こうした現象は「ユーラシア言語同盟」(евразийский языковой союз)を形成するとまで言われているが(ヤコブソン)⁽³⁾、スラヴでも母音調音と子音調音の同調(сингармонизм)傾向はすでに原スラヴ期(протославянский

период) — 印欧語内に現れ始めていた潜在的なスラヴ語集団の相対的独立期でスラヴ祖語 (праславянский язык) に先立つ時期⁽⁴⁾ — から現れており、嬰音調性 (sharp) 特徴を持つソナント [i] に変音調性 (flat) 特徴を持つ母音が後続する時、その母音は前方に引っ張られて、音質を変えている (*iŭ > iř / *iǣ° > iě, 例えば古スラヴ語の硬・軟変化すなわち o, jo 語幹名詞変化の対応関係 *sěl-ǣ°n > село 対 *pǣ°li-a°n > *poli-ěn > полеに見られる)。この傾向はやがて音節内同化法則として、開音節法則と共に、長期にわたってスラヴ語の音韻・音節構造を律して行くことになるが、その結果として、前舌母音前の同一音節内子音は調音点をその母音に合わせるべく前方に移動したのである。そのことによって、多くの (硬) 子音は半軟子音 (полумягкие согласные) となったが、これはいまだ口蓋化 (палатализация) の程度の緩やかなもので、硬子音音素の異音にすぎないものであった。ところが、軟口蓋音 (k, g, ch) と前舌母音の結合音節では両音の調音落差が余りにも大きかったために、結局軟口蓋音は母音力に屈して前 (硬) 口蓋に移動し、歯擦音 (シュー音とスー音) に転化したのである。こうした口蓋化は歴史的には三度にわたって行われるが、シュー音 (k > č' ; g > dž' > ž' ; ch > š') に変わる場合を第一次口蓋化 (первая палатализация) と称している (例、*gena > жена)。一方、スー音 (k > c' ; g > dz' > z' ; ch > s') に変わる場合には第二次口蓋化 (вторая палатализация) (例、*kojna > *kēna > цѣна > цена) と第三次口蓋化 (例、*otъka > отъца = 生格) がある。もっとも、第二次と第三次の口蓋化において、スー音だけを得るのは東・南スラヴであって、西スラヴ語は [ch] の口蓋化においてだけはシュー音 (第三次口蓋化例、*viso > vьchъ > チェコ veš, ポーランド wszy, 古代ロシア вьсь, 現代ロシア весь) を生成している。また、第一次、第二次の口蓋化が同音節内での母音から子音への逆行同化であったのに対し、第三次口蓋化は音節を越えての進行同化であり、軟口蓋音に先行する前舌母音 (*i に起源を持つ母音) が次音節の軟口蓋音を同化したものである (ただし、軟口蓋音に、*u に起源を持つ母音が後続しないことが条件だと言われている)。第三次口蓋化は初めてこれを指摘して説明しようとしたボードゥアン・ド・クルテネ (Baudoin de Courtenay) の名を取って、ボードゥアンの口蓋化と呼ばれることもあるが、この口蓋化の妨害要因として作用した母音の種類を巡っては多くの未解決な部分が残っている。

さて、以上のような軟口蓋音 (および軟口蓋音を含む子音群) の (硬) 口蓋化はスラヴに軟子音 (口蓋化子音) をもたらしたのであるが、軟子音を作り出したもう一つの要因はヨット化 (йотация) と呼ばれる現象である。すなわち中口蓋ヨット [j] の要素が、軟口蓋音を含むあらゆる子音の後ろについてそれらの先行子音を同化し、ヨット自身は先行子音にのみこまれる形で消失したが、この現象は様々な軟子音 (口蓋音) を生成したのである。かくして、第一、第二、第三次の口蓋化とヨット自身およびこのヨット化が作り出した軟子音 (口蓋音) 全てを原初軟子音と総称している。すなわち、ロシア語史の上ではこれは、j, č', ž', š', c', z', s', šč', ž'dž', n', r', l' を指したものである。一方上述の半軟子音 (前舌母音前にあった唇音 p, b, v,

m; 前舌子音 t, d, s, z, n, r, l) も11世紀中頃以後軟子音に転化して行くのである⁽⁵⁾。こうした半軟子音から二次的に転じた軟子音を第二次軟子音と呼ぶのである。第二次軟子音の出現は東・南・西スラヴの分化の初期に始まったもので、すべてのスラヴを席卷した訳ではないが、全東スラヴにとっての特徴である(ただ、ウクライナ語は後に前舌母音〔e, i〕の前での軟性を失っている)。そして、第二次軟子音の発達過程が最も徹底して発生して行くのが北部東スラヴ方言であって⁽⁶⁾、ここでは硬・軟子音音素の対立関係の発達が著しい。また、一方半軟子音的な調音はチェコ語やセルビア語に現在も残っている⁽⁷⁾。

類型論的な観点から付言すれば、硬・軟子音の対立関係の存在はスラヴ語の最も大きな特徴の一つである。他の印欧語ではこうした例は少なく、また印欧語以外でこうした特徴を持つのはフィン・ウゴル諸語だという⁽⁸⁾。ウクライナ人スラヴ学者コロミエツィ (Коломієць, В. Т.) は、次のように書いている。「後期スラヴ祖語の時期には〔e, i〕の前ですべての子音が軟化した。この軟化はその後特に北方方言—ロシア語、白ロシア語、ポーランド語—で強まり、そこでは硬・軟子音の対立は最大規模に達した……スラヴ諸語が軟子音を発達させていくという一般的傾向はフィン・ウゴル基層の影響を受けた可能性がある」。彼によれば、ロシア語では、15組の硬・軟子音ペア、3個の非相関硬子音、4個の非相関軟子音、以下ウクライナ語 18—4—1、ブルガリア語 17—4—1、白ロシア語 11—11—1、ポーランド語 14—7—1、上ソルブ語 9—12—2、セルボ・クロアチア語 4—16—1、スロヴァキア語 4—18—1、マケドニア語 4—19—1、チェコ語 3—18—1、スロヴェニア語 2—17—1 である⁽⁹⁾。すなわち、相対的に見て、東スラヴ語とレヒ群、そしてブルガリア語で軟子音の発達が著しいことが判明するのである。これらについては、フィン・ウゴル基層によって説明できるが、ブルガリア語については別の要因が考えられるという⁽¹⁰⁾。

①「強い位置」(сильная позиция)での二種類の弱母音(редуцированные)〔ъ, ь〕の峻別を強母音(完全母音 гласные полного образования)化後も保存(ъ, ь > o, e)したこと。弱母音〔ъ, ь〕はそれぞれ印欧語の短母音〔*i̯, *i〕に起源を持つが、すべてのスラヴに共通していたことは、第一に、「強い位置」と「弱い位置」(слабая позиция)の存在、第二に、「弱い位置」での弱母音の消失(ゼロ化)、第三に、「強い位置」弱母音の強母音化(完全母音化)である。「弱い位置」とは、語末音節および強母音前と弱母音の「強い位置」音節前であり、「強い位置」とは、アクセント音節、単音節語語末そして「弱い位置」弱母音音節前、そして古代ロシア語では tьrt 型結合群中の弱母音である。したがって、一般的に言えば、特にアクセントを有する音節を除いて、語末から見て逆方向に向かって強と弱の音節が交互に交替するのである。クズネツォフ(Кузнецов, П. С.)は、こうした交替を代償延長(compensative lengthening)的なものの一種として説明している⁽¹¹⁾。しかし、以下の如く、「強い位置」弱母音の強母音化のあり方ではスラヴ語間に差異が現れており、強母音化後もこれを〔o, e〕として峻別したのは東スラヴ語の大きな特徴なのである。

スラヴ祖語	古スラヴ	古代ロシア	ロシア	ブルガリア	セルボ・クロアチア	チェコ	ポーランド	上ソルブ
ъ	ъ	ъ	о	ъ	а	е	е	о
ь	ь	ь	е	е	а	е	е	е
*сънъ	сънъ	сънъ	сон	сън	сѧн(sǎn)	sen	sen	són
*дньъ	дньъ	дньъ	день	ден	дѧн(dǎn)	den	dzień	dzeń

(ただし、上ソルブでは〔ъ〕は硬子音前では〔о〕, 軟子音前では〔е〕。また〔ь〕は〔е〕)⁽¹²⁾。

⑥ *tl, *dl > l [上例7]。ただし北西東スラヴ(プスコフ、ノヴゴロド)の古文献および現代方言には、あたかも [tl, dl] の保存・反映を思わせるような、[kl, gl] 型のものがある(14世紀～15世紀プスコフ文献例 *cъtli > чькли, 現代方言 *percъtlъ > перечеклъ)⁽¹³⁾。また、[kl, gl] はいくつかのポーランド方言、カシューブ語、バルト諸語でも行なわれており(スラヴ祖語 *gъrdlo, ポーランド語 gardlo, リトアニア語 gurklys)⁽¹⁴⁾、これについて、シャフマトフの、年代記伝説に基づく「リャヒ」起源説や、類推(アナロジー)と異化(веду, ведёшь... — *ведли — вегли)の過程として説明するものがあるが、何れにせよ、バルト・スラヴ期起源の可能性が考えられる⁽¹⁵⁾。

⑦ epentheticum “l” [上例6]。

⑧ *kǫě, *gǫě > c' vě, z' vě [上例8]。

⑨ 鼻母音(риннеизм)消滅。スラヴ語の鼻母音は、〔母音 + n, m〕の結合群(diphtongoid)が閉音節を形成する時、すなわち子音前および語末に位置した時、それを開音節化するために発生したものである。この結合群中の母音が前舌母音の場合は〔ɛ〕に、後舌前母音の場合は〔ɔ〕に変えたのである。東スラヴでは、〔ɔ〕はより狭い円唇鼻母音〔ɹ〕の段階を経たのち単なる〔u〕に変じたのである(ɔ > ɹ > u)。また〔ɛ〕は先行子音が半軟子音である間は先ず広口の前舌母音〔ä〕へ、その後第二次軟子音の完成と共に〔'a〕に転じたのである(ɛ > ä > 'a)。レヒ群に属するポーランド語は鼻母音を残しているが、それは勿論スラヴ祖語に起源を持ちながらも、その直接的な継承ではなく、スラヴ祖語における母音の長さによって長い時は〔ɔ〕(ポーランド語の正書法では ą)、短い時は〔ɛ〕に変えたものである⁽¹⁶⁾。その他いくつかのレヒ群諸言語等に鼻母音の痕跡が残っているが⁽¹⁷⁾、東スラヴも含めてスラヴにおける鼻母音の消滅は概ね10世紀だと考えられている。

⑩ ẽ > ē。すなわち、東スラヴ語はスラヴ祖語の長母音と二重母音である *e, *ai, *oi > ẽ (=ē) を狭母音として継承したのである。一方、古スラヴ語は広口母音〔ä〕として、ポーランド語やブルガリア語も通常は広口母音であるのに対して、チェコ語やセルボ・クロアチア語では狭口母音である(ポーランド語 miasto, biały, ブルガリア語 хляб, бял チェコ語 míra, bílý, セルボ・クロアチア語 гнёздо, дѣло)⁽¹⁸⁾。

⑪ *kt', *gt', *tj, *dj > č', ž' [上例4, 5]。*kt, *gt (*gt > *kt) の〔t〕は前舌母

音〔i〕の前に立って口蓋化し、それは更に先行の軟口蓋音の(硬)口蓋化を惹起して、強く長い口蓋化音〔*t' t'〕を作り出した。この強い口蓋化のために、そこには、東スラヴ、南スラヴ語ではシュー音性随伴音(*kt' > *t' t' > *s' t' s' > *s' t' s')が、西スラヴではスー音性の要素(*kt' > *t' t' > *s' t' s' > *s' t' s')が随伴することとなり、その後南スラヴでは最後の歯擦音(*s' t' s' > s' t')を消去、東スラヴと西スラヴでは先頭の歯擦音を消去した(東*s' t' s' > t' s' = ㄷ、西*s' t' s' > t' s' = c')結果を得ることになった。したがって、東、南スラヴは対応しており、西スラヴと対立している。

*tj, *djの場合も上とはほぼ同様の過程が進行したと考えられる。すなわち*tj > *t' j > *t' t'あるいは*dj > *d' j > d' d'のように、やはり強い長い口蓋化音を経てのち、*kt', *gt'の場合と同様の結果を得るのである(*djの時は強い口蓋化が有性の歯擦音z', z'を生じたにすぎない)。これらは勿論すべて上に言う原初軟子音に属する。

⑫語頭je > o。開音節法則の根底にあった聞こえ増大(聞こえの波 Sonoritätswelle)の原理⁽¹⁹⁾、すなわち同一音節内の音の結合が音節頭から音節末へ向けて聞こえの小さなものから大きなものへと配置されるという原理は、各音節が成音節(成音節母音ないしは成音節ソナントー流音)で終結することだけではなく、子音群(consonant cluster)の配置順にも及んだのであるが、それはまた絶対的語頭母音の子音を被せることなく裸で現れることも本来的に制限する傾向を惹起したと考えられる。したがって、その母音前には概して語頭添加音(prothesis)〔j〕が発達するのである。しかし、実際には語頭母音の種類によってスラヴは異なる態様を見せている。例えば、〔a〕母音の前では東、西スラヴは〔j〕を添加するが、南スラヴではそれが不徹底であり(例、古代ロシア язъ, ポーランド ja, 古スラヴ азъ)、〔u〕母音前では、概して、東スラヴが無添加なのに対して南と西では添加するのである(例、古代ロシア оугъ, 古スラヴ югъ, セルボ・クロアチア jŷr, チェコ jih)。

ところが、東スラヴは語頭添加音を持った〔je〕を〔o〕に変える点で、南、西のスラヴと大きく異なっている(例、古スラヴ ѳзеро, セルボ・クロアチア語 jezero, チェコ jezero, ポーランド jezioro, 古代ロシア、ロシア озеро)。フォルトゥナートフ(Фортунатов, Ф. Ф.)は、これを〔ь〕以外の前舌母音を持つ音節前に〔je〕が来た時に起こる異化作用として説明しているが(例えば есть や ego では〔o〕に変わらない)⁽²⁰⁾、例外もあって(例、ежевика等)そのメカニズムは最終的には未解決である。

ただ、東スラヴ語の歴史を通じて、こうした円唇化(лабиализация)過程はあたかも口蓋化現象に対立するかのよう三度にわたって現れており、〔je〕 > 〔o〕過程を第二次円唇化(вторая лабиализация)と呼んでいる。第一次円唇化(первая лабиализация)については、上述の*telt > tolot や*tylt > tьltの場合の〔e > o ; ь > ь〕の変化に見られる通りである(なお、この tьlt は、上述したように、弱母音消滅過程が推移していく中で常に「強い位置」として機能し、したがって tolt に変じて行くが、特に北西部方言では「第二次母音重挿」

второе полногласие と呼ばれる *tolot* 型を生成した。その場合には勿論 *tъrt*, *tъrt* についても同様であり、*tort*, *tert* > *torot*, *teret* である)。また、第二次軟子音発生と弱母音消滅以後、原初軟子音〔ʒ', s' c'〕硬化以前、すなわち12～15世紀にかけて完結したと推定される〔'e > 'o〕過程、すなわち軟子音後硬子音前の〔e〕が〔o〕に転じていく現象（ヨーカニエ ёканье と呼ばれることもある）が第三次円唇化（третья лабиализация）である（例、*весна* > *вёсны*）。現代ロシア語では、これは〔e〕の上にアクセントが落ちる時にのみ見られるが、本来はアクセントは無関係であり、硬子音前に位置することこそが基本原理であったと考えられる。

さて、以上によって、東スラヴ語の12の指標のうち、概ね、①～⑤は北方言（レヒ群）との、また⑥～⑪は南スラヴ語との共有特徴であることが判明するが、話を元へ戻さなくてはならない。すなわち、東スラヴ語がスラヴ祖語の南、北両方言に繋がる特徴を併せ持つことをどのように説明するかという問題である。これに関連して考古学資料が次のような示唆を与えている。

最古のスラヴ遺跡は6～7世紀に現れており、それは20世紀前半にプラハ近郊で発掘された中世初期の遺跡から取り出した土器（手づくねの壺）の特徴から命名された所謂プラハ式と呼ばれる考古学的文化に代表される。最初はポーランド南部、チェコ・スロヴァキア、ウクライナ北西部で発見されたのが、のちその分布域は広がり⁽²¹⁾、それは結局ドネプル川からラバ川（エルベ川）に至る大きな空間を占めている。ヨルダーネスがスクラヴェン人に当てた全領域を含み込んでいる。この文化は基本的な特徴では同一であるが、少しずつ偏差を持っており、カルパチア東部ヴォルニ（Волынь）地方およびテテレフ（Тетерев）川（ドネプル右岸支流）上流では、プラハ式文化の東部版とも言うべき、ジトミール（Житомир）文化ないしはコルチャク（ジトミー地方、キエフの西170キロ）式文化と呼ばれる遺跡として現れるという⁽²²⁾。ハブルガエフは、ジトミール・コルチャク式文化遺跡はアヴァール来襲以前の、したがって7世紀以前の初期スラヴの政治連合体を反映したものであり、その指揮を取ったのは年代記のヴェリニャネであるから、方言・民族的にはこれはヴォルニ人遺跡だとしている⁽²³⁾。

6～7世紀のスラヴ人の考古学的文化は、ヴェネド文化、プラハ・コルチャク文化（スクラヴェン人文化）、ペニコフカ文化（アント人文化）に三分類されるが⁽²⁴⁾、ドネストルとドネプル間のドネプル右岸支流チャスミン川と南ブグ川流域に発見されたのがペニコフカ（Пеньковка）式文化である。これもまたジトミール・コルチャク式文化と同じく、概してドネプル流域である。ただしヨルダーネス等ヴィザンツでアント人に当てていたのはドナウとバルカン半島のそれであって、ドネプルではない。ヴィザンツでいうアント人の東部である。ハブルガエフは、チャスミン・ブグ遺跡の担い手が7世紀のアヴァール来襲以後も森林ステップ地帯に留まって、年代記にウリチ（уличи）の名を残し、それはまたヴィザンツでいうアンタイ（*уѣ-ы, уѣ-ич-и < Ὀϋτ α ι）に関連があるとして、ドネプル・アント人とバルカン・アント人とを繋いでいることは、すでに〔VI〕に記述した通りである。したがって、東スラヴ語と東バルカンの南スラヴ語の言語的共通性は東スラヴ人の一員であったドネプル水域のアント人と東バルカンに入植した6

世紀の史家のいうアント人が繋がりを持っていたことを暗示したものだという⁽²⁵⁾。

もう一つの遺跡がウェネド式文化（ポーランド・ポメラニア文化）である。ポーランド中・北部、東独隣接地帯、すなわち大体西はオドラ川から東はヴィスワ川の辺りまで、すなわち西バルト語族プルシ（прусы）、ヤトヴァギ（ятвяги）の居住域に接する辺りまでである。⁽²⁶⁾ ハブルガエフは次のように述べている。「7～9世紀この同じ文化要素は東欧北西部、つまり未来のノヴゴロドの地に現れている。したがって、ウェネドの名称はバルト海沿岸フィンランド人の中に定着し、今日までも彼らは東スラヴ人（現代のロシア人）の名称として使っている」⁽²⁷⁾（→本稿〔IV〕）。このことから、北大ロシア方言とレッヒ群の特徴の近似性の説明、あるいはまたスラヴ祖語北部方言に繋がる北部東スラヴ方言の存在が推定され得るのである。一方、6～7世紀のブラハ型の類型ジトミール・コルチャク文化、ペニコフカ型チャスミン・ブグ遺跡等ドネプル水域スラヴ文化とスクラヴェン・アント人との関連は、スラヴ祖語南部方言（スクラヴェン・アント方言）を継承した南部東スラヴ方言の存在を想定させるのである。

総括的に述べれば、東スラヴ語は、当初から、スラヴ祖語の北（ウェネド文化）と南（スクラヴェン・アント文化）にそれぞれ個別に繋がる北部東スラヴ方言と南部東スラヴ方言に分裂していたと考えられるのである。それは、一方はウェネド文化に結びつくノヴゴロド地域を、もう一方はスクラヴェン・アント文化に関連したドネプル水域（ジトミール・コルチャク文化とチャスミン・ブグ遺跡のペニコフカ文化）を中心とするものであった。「系統樹」論的分化論にしたがえば、6世紀以後ドネプル中流域から分化したスラヴ祖語方言（単一の東スラヴ祖語）の担い手がひたすら北上して森林地帯に入植しつつ、キエフからノヴゴロド、プスコフに至るまで、東スラヴ全体を覆い尽くし、そのことによって東スラヴ語の純粋な言語の共通性が継承されて古代ロシア語が成立したことになるが、以上の事実は東スラヴ語がすでに最初から一枚岩ではなく、東スラヴ語の統一性、共通性はその後に形成されて行った外的条件、すなわち政治・経済・社会的、そして文化的条件によるところが大きかったことを物語っている。すでに記述したように、8～9世紀に至るまで中央森林地帯は長期にわたってバルト人居住域であり、8～9世紀以後初めてスラヴ人の入植が始まるのである。しかも東スラヴ人の森林地帯への入植は「ドネプルを北上して来る南からの流れと、未来のプスコフ地区、西ブグ中・上流右岸から南下してくる北からの流れ、という、出会いがしらの流れによって実現されたのである。スラヴ人入植が二つの起源を持つことを言語的に表現したものが東スラヴ語における有声軟口蓋子音〔r～ɣ (h)〕の対立である。それは東欧のスラヴ方言を北と南に二分する最古の方言的差異である…r (g) は北ロシア、ポーランドおよび下ソルブで、ɣ (h) は南ロシア、白ロシア、ウクライナ、チェコ・スロヴァキア、上ソルブで行なわれている」（ハブルガエフ）⁽²⁸⁾。

東スラヴ語がスラヴ祖語の南・北両方言に別々に繋がる、二つの起源をもった異なる方言から出発したにもかかわらず、古代ロシア語が体现しているような（上の①～⑫のような）、すぐれて東スラヴ的な、東スラヴ語独自の統一性を形成せしめたものは、勿論古代ロシア民族

(народность)の成立が引き起こした言語統合過程である。すなわち、統一東スラヴ語は統一古代ロシア語を基盤として成立したものである。したがって、統一古代ロシア語の形成動因は言語の内的構造に関わるというよりはむしろ、先ず第一には外的な条件(キエフ政権の成立)によるものであり、その条件の中で言語の持っていた内的条件が発揮されて行くのである。しかも、古代ロシア民族は言語的・人種的に同系のスラヴ人だけを統合したものではなく、スラヴ人が主導した古代ロシア国家に統合されて行った極めて多数の種族を基盤にしている。「原初年代記」は「スロヴェネの民族」以外の多民族について、例えば、次のように書いている。「また次のものは別の民族であり、ルシに貢税を納めている。すなわち、チュヂ、メリャ、ヴェシ、ムロマ、チェレシ、モルドヴァ、ベルミ、ベチェラ、ヤミ、リトヴァ、ジミゴラ、コルシ、ノロヴァ、リビである」⁽²⁹⁾。ともかく古代ロシア民族はスラヴ人と非スラヴ人の融合の上に形成されて行ったのである。「スラヴ・フィン・ウゴル、スラヴ・チュルク、スラヴ・バルトの共生(симбиоз)」⁽³⁰⁾こそ古代ロシア国家の特徴である。

したがって、こうした非スラヴ人の使う基層言語の影響は古代ロシア語の成立に少なからざる影響を及ぼしており、語彙面は勿論、音韻面にも影を落としている。ハブルガエフによれば、北部東スラヴ方言に広がるツー弁(цоканье)はそうしたフィン・ウゴル基層の影響だとしている。そして、基層が与えた影響がツー弁のように局地的、方言的なものに止まったものもあるが、なかんずく、中央森林地帯の広大な領域を占めていたバルト人スラヴ化地域のバルト語基層は、それが極めて大きなスラヴ語との類似性を持っているが故に一層古代ロシア語の形成に決定的に重要な影響を及ぼしたという。彼によれば、2000年紀の初頭以前(言語面で言えば、弱母音消滅以前)のスラヴ語とバルト語は語根と接辞フォンドが相当共通である上に、それが規則的な音声学的・音韻的対応関係を持っていて、中央森林地帯の二言語併用住民(バルト人)にとって、スラヴ語は同一語形の異なる発音規範といった程度の認識にしかすぎなかった訳である。最後に、彼が挙げているいくつかの点を列挙しておく。①規則的な母音の対応関係(例、ū—ы; ū—ъ; ī—ь; ä—о等)を持った同一語根例(dŭm-as-дым-ъ, bulvōn-as—бълван-ъ, birkav-as—бырков-ьщ等)、②ū—īとъ—ьの対応保存に関連した、弱母音消滅の後れ(西、南スラヴに比して遅い)、特にtŕt, tŕt > tort, tertといった根強い対立保存、③tort > torot(母音重挿)形に見られる、流音前短母音の保存による再編(例えば、レヒ群*vorna > *vārna > vrona、ポーランド語wronaと同じスラヴ祖語北方言を継承した北部東スラヴ方言が流音前の母音随伴音を消さずに保存したのは、同語根のバルト語が流音前に母音を残したことによる、*-vāron-+バルト語-vār- > ворона, cf. リトニア語vārna)⁽³¹⁾。

こうして、9～11世紀にかけて中央集権国家としてのルーシが次第に文化・経済・政治的に結合を強めていく中で、古代ロシア民族の言語としての古代ロシア語が成立するのである。そして、このことが東スラヴ語の統一性の基礎を作り出したのである。

〔注〕

1. А. М. Селищев, Старославянский язык, Часть 1, Учпедгиз, М., 1951, стр. 169
2. С. Б. Бернштейн, Очерк сравнительной грамматики славянских языков, Из-во АН СССР, М, 1961, стр. 78-80
3. 城田 俊、ロシア語の音声、風間書房、東京、1979, p. 17-18
Г. П. Хабургаев, Старославянский язык, Издание второе, Просвещение, М., 1986, стр. 79
4. Г. П. Хабургаев, Старославянский..., стр. 65-66
5. В. В. Иванов, Историческая грамматика русского языка, Просвещение, М., 1983, стр. 152
6. К. В. Горшкова, Г. П. Хабургаев, Историческая грамматика русского языка, Высшая школа, М. 1981, стр. 55
7. И. Букатевиц, С. А. Савицкая, Л. Я. Усачева, Историческая грамматика русского языка, Вища школа, К., 1974, стр. 79
8. Историческая типология славянских языков, под ред. А. С. Мельничука, Наукова думка, стр. 31-32
9. Ист. типология... стр. 39
10. Ист. типология... стр. 39
11. В. И. Борковский, П. С. Кузнецов, Историческая грамматика русского языка, Начка, М., стр. 99
12. Ф. П. Филин, Образование языка восточных славян, Из-во АН СССР, М.-Л., 1962, стр. 260
13. М. Петер, Историческая грамматика русского языка, Tankönyvkiadó, Budapest, 1969, p. 68
Радосав Бошкович, Основы сравнительной грамматики славянских языков, Фонетика и словообразование, Высшая школа, М., 1984, стр. 124
14. Радосав Бошкович..., стр. 124
15. М. Петер..., стр. 68
16. Ист. типология..., стр. 37
17. М. Петер..., стр. 50
18. В. В. Иванов..., стр. 150
19. Н. Ван-Вейк, История старославянского языка, Из-во иностранной литературы, М., 1957, стр. 64 (Von Nicolaus Van Wijk, Geschichte der althkirchenslavischen Sprache, Erster Band, Laut-und Formenlehre, Berlin und Leipzig, 1931)
20. М. Петер..., стр. 48
21. Большая советская энциклопедия, Том 20, Из-во Советская энциклопедия, М., 1975, стр. 491
国本哲男、ロシア国家の起源、ミネルヴァ書房、京都、1976, p. 150-151
22. 国本哲男..., p. 147
Г. А. Хабургаев, Становление русского языка, Высшая школа, М., 1980, стр. 76
23. Г. А. Хабургаев, Становление..., стр. 76-77
24. 国本哲男..., p. 152, 156-160, 255
25. Г. А. Хабургаев, Становление..., стр. 79
26. 国本哲男..., p. 156-157, 270
Г. А. Хабургаев, Становление..., стр. 80
27. Г. А. Хабургаев, Становление..., стр. 80
28. Г. А. Хабургаев, Становление..., стр. 87
29. 日本古代ロシア研究会 (国本哲男、山口 巖、中条直樹他)、ロシア原初年代記、名古屋大学出版局、1987, p. 11 (p. 11)
30. Г. А. Хабургаев, Становление..., стр. 106
31. Г. А. Хабургаев, Становление..., стр. 106

(1990. 5. 8 受理)

論集2号(1989年)掲載、「ロシア語史概説(2)」の12ページ最終行に原稿1行分の脱落があります。

原文は以下の通りです。(下線が脱落部分)

このことは、年代記からこれらの名称が消える年について指摘したチェレプニンの研究(Ⅳに記した)とも一致する(「ーイチ」の内ではクリヴィチが一番早く、ドレゴヴィチ、ラヂミチ、ヴァチチと続く)。そして、年代記編者の「ラヂミチとヴァチチはリャヒから出ている」という記述(シャフマトフはそこから東スラヴ語東群へのレッヒ群参与説を導き出した)は古い伝承に頼った可能性が強い(ハブルガエフはその伝承がザルヴィンツィ文化の担い手達の時代から続いてきた可能性について述べている⁽⁵²⁾)。